
冬の星 待つ者待たれる者

haruhi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の星 待つ者待たれる者

【Nコード】

N9534C

【作者名】

haruhi

【あらすじ】

僕と彼女の街に冬がやってきた。アイツを待ち続ける彼女を傍らで見守る僕。ちよっぴり切ないストーリー。そして「僕」の正体とは？

僕と彼女が住む街に冬がやってきた。小さなアパートのベランダには毎朝霜があり、彼女の大切な観賞用パセリは粉砂糖をかけたみたいになる。

夜は空気が澄み、蒼い空に張り付いた星は氷の粒をちりばめたみたいでなかなか幻想的である。

僕と彼女の住む街は美星という。こんな素敵なことってあるかしら。越して来たばかりの頃、彼女は夜毎にそう言っていた。

星を見るのは彼女の習慣で毎日ベランダに出る。

深夜一時。きっかり深夜一時に彼女は空を見上げる。オリオン座を探しているのだ。

素敵な習慣でしょ。と彼女は言う。

僕が寒いのが苦手だって知ってるくせに。

そんなことはお構いなしに彼女は古びた丸い椅子を引っ張り出してきて一緒に見ようと言う。

僕は背中を丸めて五分だけ彼女の星座鑑賞に付き合うことにしている。正確に言うと、星座鑑賞をしている彼女の横顔を見るためである。

青白い顔、きちんと手入れされた茶色い髪、低めの鼻、全てがいつも通りだ。小さな爪には淡いピンク色のマニキュアが塗っており、これまた小さな手には濃いピンク色の携帯電話を握っている。

彼女はアイツが来るのを待っているのだ。

僕はアイツが嫌いだ。第一、アイツの目は地上から離れすぎている。石ころにつまずいたって仕方ない。すましたメガネもいけ好かない。

彼女はアイツが来るのを待っている。

「別にここに来るわけじゃないのよ」

と彼女は笑い、胸の辺りで両手を重ねる。

ココ。と短くつぶやき、彼女は大げさに伸びをし、微笑んだ。

夜のおいがする。

今日はもう来ないみたいね。部屋に戻りましょうか。

彼女は唐突にそう言った。

「うん。そうしよう」

彼女は僕の腕を掴んで離さない。身体的全てから冷たい気と寂しさが伝わってくる。

僕は自分の全てをもって彼女を温めようとした。

部屋の白い明かりよりももっと白く、頼りないその人は今にも消えてしまいそうな気がしてならなかった。

アイツがこの前来たのは秋も終わる頃だった。その時も彼女はこのベランダから星を見ていた。

「僕の街では星はあまり見えないんだ。星を見るには明るすぎる」
オリオン座を探す彼女にそう語りかけていた。

でもアイツが見えていないのは星だけじゃない。

それでも、彼女はアイツを愛している。

僕は冷たくなっていく彼女とは逆に、身体の中が熱くなるのを感じた。

星を見るのは彼女の習慣でその横顔を見るのが僕の習慣でアイツを待つ彼女が日常へ帰ってくるのを待つのが僕だ。

「明日はきつと来るよ」

僕はなるべく優しく言った。

僕にはわかる。左側のヒゲがピリピリするもの。明日は雨だ。アイ

ツは雨の日にやってくる。

「そうね。ココアでも飲みましょっか」

彼女は清潔に微笑んだ。

（後書き）

初めてここに書かせてもらいました。未熟者ですが誰かに読んでもらえたら幸いです。冬・星座・お酒・ピンクこの小説のキーワードです。それぞれが彼女の心を描写しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9534c/>

冬の星 待つ者待たれる者

2011年1月16日00時33分発行